入選　（低学年の部）

「お母さんになって分かったこと」

広島県　広島市立日浦小学校　三年

久保田（くぼた）　彩煌（さき）

「お母さんが、この子の命より他のことをゆう先してどうするんね。この子はまだ、赤ちゃんなんよ。」

セキセイインコのピーちゃんは、きのうの夜、家族になりました。朝ごはんを作って食べさせてあげたけど、ピーちゃんは上手に食べられず、時間ばかりすぎていきます。

「あっ。出る時間だ。学校行って来る。」

あわてる私に、お母さんが続けて言いました。

「きのうの夜から、さきちゃんはお母さんになったんだよ。」

私は、はっとして、投げたスプーンをもう一度持ってごはんをあげました。ピーちゃんは、おいしそうに食べたり、考え事をするようにじっと動かなくなったりをくり返します。

（そりゃそうだった。ピーちゃんが死んだら困る。ああ……。早くしてくれ。）

「ピーちゃん、ただいま。」

一番にピーちゃんに会いに行きました。学校にいる時も、ピーちゃんのことが気になってしょうがありませんでした。すると、ピーちゃんは口やむねがどろだらけです。上手に食べられなかったごはんがついて、毛が固まったまま鳴いていました。

「『お母さんおなかすいたよ』って待ってたよ。」

と、おばあちゃんが笑顔で学校にいる間のピーちゃんの様子を話してくれました。お昼ごはんをあげてから、固まった毛をやさしくふいてドライヤーでかわかしてあげました。毛がふっくらしてくると、ピーちゃんは気持ち良さそうに目をつむります。

「気持ちいいんじゃね。いたかったね。こぼした時、すぐにふいてあげれば良かった。ことり用のよだれかけがあったらいいのに。」

しょんぼりした気持ちで言うと、お母さんが

「最初から全部上手にできるお母さんなんていないよ。さきちゃん母さんだって、昨日初めてお母さんになったんだから、少しずつお母さんになっていけばいいんよ。」

と、はげましてくれてうれしくなりました。

やっと自分のお昼ごはんを食べながら、

「赤ちゃんじゃけえ、手間がかかるんよね。」

と言うと、おじいちゃんが、お母さんは明け方早起きしてピーちゃんが寒くないかお世話していたと教えてくれました。

私のお母さんは、

（もう、こういうのやめてほしいんよね。）

と、思うような失敗をよくくり返します。でも、自分のことより私のことを一生けん命してくれます。

（お母さん、私、自分のことを後回しにしてお世話をする気持ちが少し分かったよ。ピーちゃんは、本当のお母さん、兄弟、家族とお別れして悲しい思いをして、私の家族になったんだ。私、幸せにしてあげたい。）

「お母さんって大変じゃね。」

私のお母さん、ありがとう。